命の大切さを実感できる飼育

全国学校飼育動物研究会　会長　宮　下　英　雄

全国各地より、ここ宇都宮にご参集いただきましてありがとうございました。台風一過の素晴らしい天候にめぐまれて開催できましたこと大変嬉しく思っております。これも、研究大会開催にあたり、ご尽力いただきました日本小動物獣医師会の諸先生方、栃木県獣医師会の諸先生方をはじめ、栃木県教育委員会、宇都宮市教育委員会、栃木県小学校校長会、幼稚園連合会、ＰＴＡ連合会等々の関係各位の皆様方のお陰です。

この全国学校飼育動物研究会は、今回で第３回を迎えました。発足当時の状況を少しだけお話させていただきますと、その当時は、毎日のように、テレビや新聞をはじめマスコミは、鳥インフルエンザについてのニュースを報道していました。その影響を受けて、鳥インフルエンザに感染すると、ということで子どもたちが大切に世話をしてきた飼育小屋から、子どもたちの姿が見えなくなってきていました。当然、可愛がってきたニワトリ等が死を迎え始める事態が各学校で見られるようになりました。

「ニワトリが死んだ。」この事実は、鳥インフルエンザに感染して死んだという誤解を招き、さらに子どもたちも、飼育小屋担当の先生方も近づかなくなってしまいました。ニワトリの死は、インフルエンザによるものではなく、餌をあげなかったための「餓死」でした。生命尊重、動物愛護の教育的価値を目的にした教育活動が、突然ストップしてしまった結果です。

折しも、国内では、かつて経験したことのない猟奇的な事件が連続して報道され、学校をはじめ教育関係者に大きな衝撃を与えました。それは、小学６年生の女子がクラスメートの女子をカッターで殺害するという事件です。また、幼い園児を、高い所に設置されていた駐車場から転落死させるという事件です。同様な事件が各地で発生し、人間の命が躊躇なく粗末にされていると解される事件でした。命の大切さを実感していない事件の連続です。現在でもその傾向は限りなく続いていることはまことに残念なことです。

そのとき、教育と動物飼育のかかわりを中心とした研究会発足の声が上がり獣医師の先生方と教育関係者とのネットワークづくりが始まりました。東京大学名誉教授唐木英明先生、白梅学園大学学長無藤隆先生、国立教育政策研究所総括研究官鳩貝太郎先生、群馬県獣医師会桑原保光先生、日本小動物獣医師会中川美穂子先生等々、それに私が加わりスタートした次第です。前文部科学省主任視学官現在文教大学教授嶋野道弘先生、文部科学省教科調査官日置光久先生、杉田洋先生にもあたたかなご支援をいただきました。

子どもたちへの体験の機会を提供しよう、そして、豊かな心、学ぶ意欲、生きる力を育成したい。子どもたちのやさしさ、思いやり、人間らしさを取り戻したいという切なる願いからでした。そして、第１回目「命の実感をあたえ、情愛ゆたかに育てたい」、第２回目「子どもが変わる学校飼育動物」、第３回目「園・学校で命の大切さを実感出来る飼育」を研究テーマにして取り組んで参りました。

今回のテーマは、「命の大切さ」を実感をとおしていかに理解させるか、ということですが、現在の子どもたちには、非常に難しい課題解決の一つです。それは「ウサギを抱えて、先生どこにスイッチがあるのと言いながらスイッチの場所を探し始める子ども」「ウサギがじっとして動かなくなるとデンチ、デンチと騒ぎ、デンチをねだる子ども」がいるということです。「可愛いぬいぐるみのウサギさんだと思っているのでしょうか」。スイッチが命、デンチが命とも解されるしぐさです。また、死んでしまったカブトムシの体をバラバラにし、接着剤で、もとの形に戻そうとする子もいるということです。

子ども世界とは異なりますが、大人の世界では、ロボット犬に見られる癒し効果をねらったコンピューター玩具が流行りはじめました。話し相手をする、挨拶をする、時には歌うなど、インプットしておけばそれに応える数々のしぐさができるということです。命の大切さを実感できるか、これこそ疑問に感じます。また、このような家庭で育った子どもたちの将来を考えると、恐ろしさを感じるのは、私だけでしょうか？

また、こんな情報もあります。可愛がっていた動物が突然死んでしまいました。飼い主は、悲しみのあまり生きる力さえ無くしかけています。その時、その動物のＤＮＡを採取し、その動物と全く瓜二つのコピー動物を誕生させる商売があるということです。ペットショップで動物を販売するより、かなりの収入があるとも聞き及んでいます。何体もコピーしたら、大変な収入にはなりますが、倫理上の課題が追求されてくると思います。その解決策を探るためにも、講演、事例報告、パネル等々の中で導き出し合い、心豊な子どもたちの育成を目指していきたく存じます。

今回の研究大会は、日本小動物獣医師会の 2005 年時学会の市民講座にあわせて開催させて頂きました。発足間もないこの研究会にあたたかなご支援ご協力をいただきました日本小動物獣医師会の関係各位に厚く御礼申し上げます。

（聖徳大学人文学部児童学科教授）